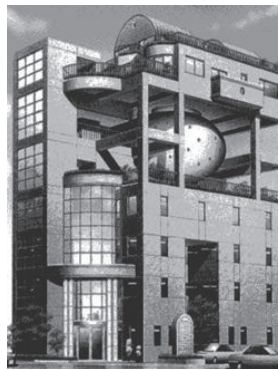


大阪万博の メインテーマ

「いのち輝く未来社会のデザイン」 Designing Future Society for Our Lives に提案する

⑤

たまご理
院長
石垣 邦彦



〒581-0061
大阪府八尾市春日町1-4-4
電話072 (991) 3398
FAX072 (991) 4498
ホームページアドレス
http://www.tamagobl.com/

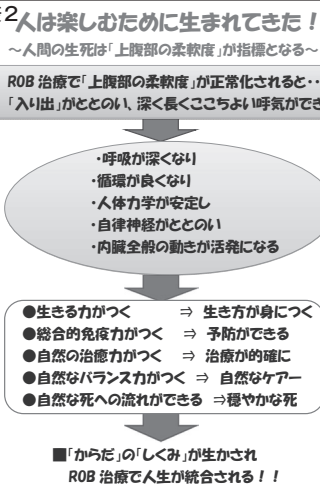
たまご理論で病気のしくみを考える

日本国民への提言

②8

日本の国民一人ひとりが、自らの「からだ」の「しくみ」を生かすことで、日本を再生する

表1 健康体の三大特徴
(1)「上腹部の柔軟度」＝腹部の柔軟度と形態と温度分布
「健康体」の場合、立位で上腹部が下腹部より少し低く手で上腹部を圧迫しても圧痛は無く、しりこりもなく、その圧迫をとくとすぐに元に戻る柔軟度があり適度な緊張がある。また、腹部全体は温かくほぼ同一温度である。
(2)頭部と足先の温度差
「健康体」の場合、頭部が足先より約1度から3度高い範囲である。
(3)立位での姿勢
「健康体」の場合、正面からみると脊柱は正中線上でまっすぐであり、側面からみると生理的に適切なS字状の湾曲を保ち、人体の各部位置に余分な緊張と力の過剰な負担がない。

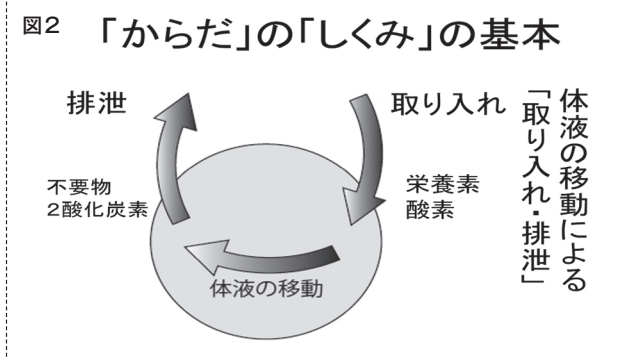
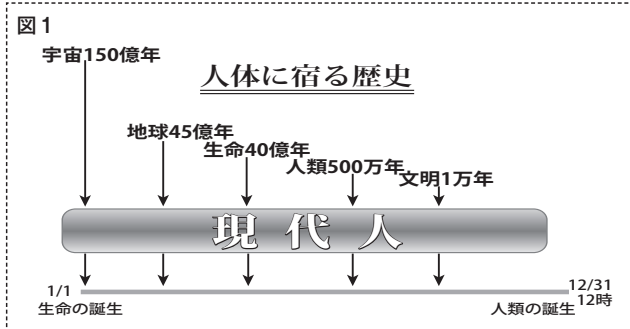


会議は平成4年1月、部長級以上の幹部が一堂に会して開かれた。テーマは「ニューパラダイム」である井深は体調が芳しくなかったが、テーマに惹かれて参加を決めたと話している。
発言は7分程度にすぎない。それでも「皆さんの話を聞くと、これはニューパラダイムの話じゃない」と断じた言葉は厳しい。
社員の議論は、デジタル化でどう業界の主導権を取るかが中心だったが、井深の観点は違っていた。
「デジタルだ、アナログだなんてのは、道具立てにすぎない。これをもってニューパラダイムというのは非常におこがましい」
デジタル化は道具(モノ)だといわんばかりの指摘は、社員に衝撃を与えたようだ。井深の言うパラダイムは「大衆全部が信じて疑わないこと」である。社会が共有する価値観といえようか。これを覆すパラダイムシフトが大事なのだと訴えた。
井深は現代社会のパラダイムの例として「カルトとニュートンが築き上げた『科学的』という言葉に世界の人がまんまと騙されてきた」と指摘している。
科学技術であるが、万事が解決するという思考を、戒めたかったのかもしれない。(中略)ただ、技術を『道具立て』とみたととき、それがもたらす新たなパラダイムとは何だろうか。

「ここの長谷川氏の大事な提案は科学技術を『道具立て』とみたととき、それがもたらす新たなパラダイムとは何だろうか」ということである。
大阪万博誘致につけての一番の理由が「根拠にもありませんので深く掘り下げてゆきます」そのことは、われわれ現代人(図1)はなにをなすべきかということも通じてきます。そのためにも、われわれの存在そのものをとおき振り返りましょう(図一)。

①われわれの「からだ」は150億年の歴史を内蔵している。
②われわれの「からだ」は、地球45億年の歴史を内蔵している。
③われわれの「からだ」は、生命40億年の歴史を内蔵している。
④われわれの「からだ」は、人類5000万の歴史を内蔵している。
⑤われわれの「からだ」は、文明1万の歴史を内蔵している。

「この歴史を内蔵する「からだ」の「しくみ」の基本の「はたらき」は、体液の移動による「取り入れ・排泄」



この歴史を内蔵する「からだ」の「しくみ」の基本の「はたらき」は、体液の移動による「取り入れ・排泄」(図2)です。原始の単細胞の時から細胞内の活動だけでは細胞の「いのち」は成り立ちません。細胞外から必要なものを取り入れ、細胞内で活用できるように消化・吸収し、不要なものを細胞外に排泄することに

よって細胞の「いのち」は成り立っているのです。
60兆の細胞から成り立っている人類も「からだ」の「しくみ」は同じです。
その現象は「体液の移動による「取り入れ・排泄」・吸収・排泄」の「はたらき」を、地球環境の過酷な変化に対応して、絶えず維持するために新たな「からだ」の「しくみ」を器官を生み出してきたのが多細胞生物の一種である人類です。
その現象は「体液の移動による「取り入れ・排泄」・吸収・排泄」がスムーズに「はたらく」状態「からだ」の「しくみ」がスムーズに「はたらく」状態「上腹部の柔軟度」がやわらかい状態(表1)では「呼吸・循環・人体力学・自律神経・内臓全般の動き」がととのうため、「元気で生き」おのずから病気の予防となり、病気の時には自然の治癒力が生まれるため無理のない確かな治療とケアとなり、老化と死に行くことにもおたやかなり

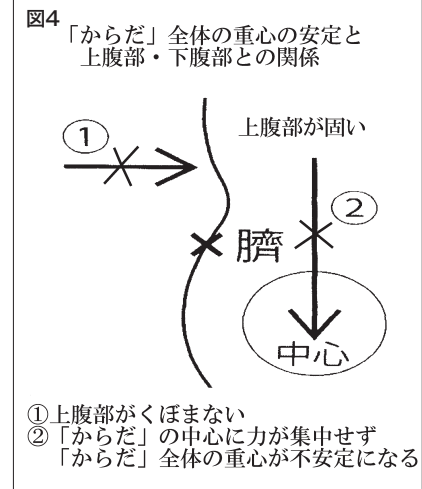
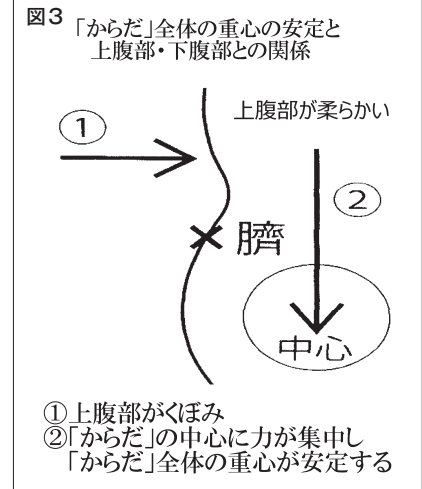
「上腹部の柔軟度」と「人体力学」との関係を探る

今までの臨床研究の流れを掲載し、

今度も前2回に引き続き、腰痛に至る原因が85パーセント不明というその理由を、「上腹部の柔軟度」を通してさらに深く解明してゆきます。

《原始の単細胞の生命から人体力学に至るまで》

「Ⅰ入り出の原動力Ⅱ「体液の移動」による「体腔圧の変動」と人体の「正常機能・構造・形態」との関係」
「Ⅱ体腔圧の変動」状態が「上腹部の柔軟度」の程度にあらわれ、人間の姿・形・動作と密接な関係がある」
「Ⅲ人体力学(姿勢と動作)・発見に至る経緯について」
「Ⅳわたしの自身の「からだ」の気づきについて」
「特に人体力学Ⅱ姿勢と動作の観点から」
「Ⅴ妻の妊娠による「からだ」の変化が大きき発見につながる」
「Ⅵ胸腹(むねばう)とはなにかという状態」
「Ⅶ背中・腰・膝の曲がり、頸が回らない、すい足でないと歩けない、手が上がらないなどの姿勢と動作の異常は、「からだ」全体を守るための防衛反応」
「Ⅷお腹を押さえた痛みⅡ腹部の圧痛と頸の緊張Ⅱ背中・腰・膝の曲がりなどの関係」
「Ⅸ腹部の圧痛を明確にする」
「Ⅹ引き続き腹部の圧痛について」
「Ⅺ日々の生活の中で片寄った動き・姿勢がないにもかかわらず、姿勢の異常・関節の変形・だるさ・痛みがなぜ出るのか」
「Ⅻあらゆる姿勢・動作と上腹部のくぼむ度合いⅡ上腹部の高低差には、相関関係がある」
「Ⅼ臨床研究例(仰臥位Ⅱ上向き) 姿勢と腹部の圧痛」
「Ⅽ臨床研究例(立位Ⅱ立った状態) 姿勢と



のとなる(表2) ことになり。そのようになると、人類とはやういふものかと考える。
① わたしたち人類は「生きもの」である。
② 多細胞生物である人類には、「生まれ・生きぬき・老い・死にゆく」という「いのち」をつなぐ「からだ」の「しくみ」がある。
③ その「からだ」の「しくみ」である「老化と死」は、わたしたち人類にとっては正常なことであり、避けては通れない。
④ その「からだ」の「しくみ」がスムーズにはたらく状態「上腹部の柔軟度」がやわらかい状態では、呼吸・循環・人体力学・自律神経・内臓全般の動きがととのうため、「生まれ・生きぬき・老い・死にゆく」ことがスムーズに運ぶ。
⑤ つまり、「元気で生き」おのずから病気の予防となり、病気の時には自然の治癒力が生まれるため無理のない確かな治療とケアとなり、老化と死に行くことにもおたやかなり

のとなる(表2) ことになり。そのようになると、人類とはやういふものかと考える。
① わたしたち人類は「生きもの」である。
② 多細胞生物である人類には、「生まれ・生きぬき・老い・死にゆく」という「いのち」をつなぐ「からだ」の「しくみ」がある。
③ その「からだ」の「しくみ」である「老化と死」は、わたしたち人類にとっては正常なことであり、避けては通れない。
④ その「からだ」の「しくみ」がスムーズにはたらく状態「上腹部の柔軟度」がやわらかい状態では、呼吸・循環・人体力学・自律神経・内臓全般の動きがととのうため、「生まれ・生きぬき・老い・死にゆく」ことがスムーズに運ぶ。
⑤ つまり、「元気で生き」おのずから病気の予防となり、病気の時には自然の治癒力が生まれるため無理のない確かな治療とケアとなり、老化と死に行くことにもおたやかなり

の個人的な課題も、ヒトとしての「いのち」を未来にわたって受け継ぐという種としての課題をも解決することができるとする。
この提案は全人類にとってのテーマであり、全人類にとっての解決策となります。先進諸国・開発途上国にかかわらず全参加国にとっての共鳴と共感を得られることになりま。大阪万博誘致に対して大きな原動力となります。
また、1万の文明という創意工夫(知恵・哲学・宗教・思想・技術・科学・医学など)の歴史をもつ人類にとっても大きなパラダイムシフトとなります。
そのためには、この連載で度々お話しさせていた「上腹部の柔軟度」と「呼吸・循環・人体力学・自律神経・内臓全般の動き」との関係、特に人体力学との関係を再度深く、お話しさせていただきます。世の中が変わります。

かわらずいろいろな症状が出てくるので不審に思われます。そのため、この時は特に詳しく「いのち」を説明させていただきます。もちろん「上腹部の柔軟度」がやわらかい状態になってきます。それとともに腰が膝が伸びてきます。
つまり、いつも腹いっばい食べる人は胃での滞留時間が長くなるため「上腹部の柔軟度」がたかくなり。そのため、曲を安定させようとして腰・股関節・膝が曲がってゆくの。胃カメラで診断できるのは胃の上部です。つまり、胃の表面の粘膜がどうなっているかということです。ガン・ポリープ・潰瘍があるかどうかはほとんど限られます。胃そのものの全体的な動きがどうなっているかをほとんど診ていません。しかし、胃の動きが悪いと「上腹部の柔軟度」が固くなっているで、それが原因で腰痛を起している場合が多いのです(図4)。

このTさんの例などから以上ことが考えられます。
①「上腹部の柔軟度」が固いことなど自分では分からない。
②「上腹部の柔軟度」が「からだ」全体の重心の安定と関係があるなど意識したこともない(図3と4)。
③ また、やわらかく食べられること自体が元気の証だという社会的な風潮があり、本人もそう思い込んでいる。
④ たかさん食べてもお腹が痛まない原因が、自分の内臓感覚がボケて「失体感症」であるためだとおもっている。逆に自分の胃は丈夫だと錯覚している。
⑤ また、現代医学の胃カメラで分かる範囲は胃のごく一部の粘膜の器質的変化のみであり、胃の動きは分からない。ましてや胃の動きの程度と「上腹部の柔軟度」とのかかわりがあるとは分からない。そのため、自分の胃が悪いとの自覚がないし、胃と人体力学的な視点もなく腰痛に至る原因も不明となる。以上、Tさんの例を通して「上腹部の柔軟度」をテーマにして「上腹部の柔軟度」を通して腰痛に至る原因が85パーセント不明というその理由を、理由を、さらに解明してゆきます。お楽しみに。

「上腹部の柔軟度」が膨満し固くこの状態では、明らかに上腹部がくぼまないため下腹部の「からだ」全体の中心に重心が集中せず、「からだ」全体が不安定となります(図4)。この場合、腰部と股関節でその不安定さのバランスをとっていたために長い年月、腰・股関節に物理的な圧力が加わり続け腰部の变形、股関節の变形と手術までに及んだのです。
② たかさん食べてもお腹が痛まないという食いつながりによって力がでるという意味ですが、本当に元気があれば「からだ」に必要な食事の量をいたいた時は、おのずから量を置き、やわやわ言えるのが正常です。内臓感覚がはげいているその満腹感をキャッチできなくなります。
③ たかさん食べてもお腹が痛まないという食いつながりによって力がでるという意味ですが、本当に元気があれば「からだ」に必要な食事の量をいたいた時は、おのずから量を置き、やわやわ言えるのが正常です。内臓感覚がはげいているその満腹感をキャッチできなくなります。
④ たかさん食べてもお腹が痛まない原因が、自分の内臓感覚がボケて「失体感症」であるためだとおもっている。逆に自分の胃は丈夫だと錯覚している。
⑤ また、現代医学の胃カメラで分かる範囲は胃のごく一部の粘膜の器質的変化のみであり、胃の動きは分からない。ましてや胃の動きの程度と「上腹部の柔軟度」とのかかわりがあるとは分からない。そのため、自分の胃が悪いとの自覚がないし、胃と人体力学的な視点もなく腰痛に至る原因も不明となる。以上、Tさんの例を通して「上腹部の柔軟度」をテーマにして「上腹部の柔軟度」を通して腰痛に至る原因が85パーセント不明というその理由を、理由を、さらに解明してゆきます。お楽しみに。